

東ネグロス州トリニダット村の子どもの暮らし

社会学部 1 年 Y. H.

1. はじめに

私がこのフィリピンエクスポージャープログラムになぜ参加したかという、フィリピンの子供たちの暮らしぶりについて詳しく知りたかったからである。昨年の夏にスタディーツアーとして三日間だけフィリピンに行く機会があり、実際に孤児院の子供達と交流したり、パヤタス（ゴミ山の麓にある村）の家庭に訪問したりした。その時に、そこにいる子供達は実際にどのように生活をしているのか、なぜこの孤児院という場で暮らしていかなければならなくなってしまったのか、ここで育っていった子供達はどのような将来を送っているのか、というところに疑問を感じた。しかし、ただ交流してそれぞれの文化をシェアするのが主な目的であったし、三日間と時間が短すぎたせい、深く学ぶことができなかった。そして、なぜこのような暮らしを改善することができないのか、そもそも貧困と言われているがどのように貧困なのか、などというところまでは知ることができなかった。だから今回実際にホームステイを通してその地域の暮らしを自分が実際に体験し、インタビューを通してより詳しく子供達の暮らしを学んでいきたいと強く思っていた。

また、私は大学で社会福祉を専攻している。将来は日本にとどまらず、世界で生活に困っている子供達を支援できるような活動をしていきたいと考えているため、今回のプログラムに参加することはとても意義あるものであると考えた。

2. トリニダット村での暮らし

トラックの荷台に乗って約 1 時間。トリニダット村は山を登ったところにある小さな村であった。道路はところどころ舗装作業がされているが、基本的には砂埃の舞うガタガタ道で、車が一台なんとか通れるような道であった。バコロドとは全く変わった景観で、一面が緑の椰子の木で囲まれていた。鶏の声だけでなく豚や山羊の声が聞こえてきて、とてもどかな印象だった。しかし、実際のホームステイやインタビューを通して、生活は厳しいものであることがわかった。水道もガスもない暮らしで、電気もきちんと整備されていない。毎朝日の出と共に起き、山道を歩いて近くの共同水汲み場まで水を汲みに行き、畑を耕し、家畜の世話をし、乾いたココナッツの皮を燃やして火を焚き料理する。夜は、油が入った瓶の口に火をつけた特製のランプだけである。お風呂に入りたくても、手を洗いたくても、まずは水を汲みに行かなくてはならない。街灯も全くないでこぼこな道を、ランプを片手に水汲みに行く。足元は滑りやすい粘土質の土の道。真っ暗で、自分が今どこにいるのか、どの方角を目指しているのかもわからなくなる。

そんな村で、私は三日間で 6 人にインタビューすることができた。インタビューすると、彼らの生活にはたくさんの課題が複雑に混在していることがわかった。そして時には、涙してしまうこともあった。

3. 暮らしの現状

そのなかでも、私は、一番印象に残ったレーチャ（女性 43 歳）の家庭に注目した。なぜなら、彼女の家族が抱えている課題や生活状況は、同村全般に見られると考えたからである。彼女は、一人目の夫との間に男の子が二人（21 歳と 20 歳）、その後離婚して、二人目の夫(70 歳)との間に女の子が二人（10 歳と 7 歳）いて、現在は二人目の夫と四人の子供と一緒に暮らしている。二人の男の子は、幼稚園のときにクラスメイトにいじめられ、そこからずっと学校に行くことができなくなってしまった。学校に行くことよりも、畑仕事や家事を手伝うということを選び、教育を受けることができなかったため、現在 21 歳・20 歳という年齢になっても仕事も見つからず、今もなお、毎日手伝いをして過ごしている。

二人の女の子は 4P'S (Pantawid Pamilyang Pilipino Program) といったフィリピン政

府による 0 歳から 18 歳までの子供への資金援助制度を利用して、なんとか小学校に通っている。家族の収入は、月曜日から土曜日まで、農場で働いて得られる 1 日あたり 120 ペソ（約 284 円/2016 年 4 月 16 日の為替レート）の賃金と、自分たちで育てているタバコの葉を売ることによって得られるわずかな収入だけである。1 日約 130 ペソ（約 308 円）を 6 人で分けていると考ええると、食事也十分に摂ることができない生活であることがわかる。

また彼女らは農場労働者で、毎日他の農地まで出向かなければならない。簡単に米が買えるほどの収入がないため、家の近くで育てているとうもろこしを毎日の主食としている。風邪を引いたときなどは、病院に行けても薬を買うお金を持っていないため、薬草で治しているという。

4.抱えている課題

まず、課題として、農業労働者であるということが挙げられる。もし彼女自身の土地を持っていれば、その土地だけで働けばいいし、彼女ら自身が自由に耕作し、自由に価格交渉もできる。それによって、低賃金だけの生活から脱却でき、彼女たちの努力によって収入を増やすこともできると思う。フィリピンの土地は、JICA（Japan International Corporation Agency 独立行政法人国際協力機構）によると、フィリピン政府は 1987 年から「総合農地改革計画（Comprehensive Agrarian Reform Program:CARP）」を開始し、2003 年 3 月末時点で土地配分計画 806 万ヘクタールに対し 70%の配分が完了しているという。¹

しかし実際には、政府と地主が手を組んで、賄賂などを利用して土地を分配しない場合が多く、農地の解放はまだ全体の 20 パーセントにも満たないという声もある²。私も、農村地域であるトリニダット村のインタビューを通して、村人たちが自分自身の土地を手に入れられていない事、市長すら農地改革の現状をあまり把握していなかった事などから、農地改革が進んでいないことを実感した。

また、他の課題として、二人の息子が学校に行かれないことが挙げられる。通学する経済的余裕がないうえに、二人の息子は幼稚園でいじめに遭い、それが大きなきっかけとなって学校へ行かなくなってしまった。

学校に行かなくなってしまったことは、「教育」現場の問題とも関わっていると考えられる。同国で 3T problem と呼ばれているように、①教師（teacher）②教科書（textbook）③教室（teaching room）が不足している。トリニダット村の高校教師によると、この村でも 670 人の生徒に対して、教員が 15 人しかいないそう。そのため、11 クラスしか用意できず、1 クラスあたり 60 人の生徒をたった 1 人の教師が英語から数学まですべて担当している。また、その高校教師の話によると、村が中山間地域に位置していることから、きちんと物資供給がされてないため、教科書は隣の町から借りてくる必要があり、二人で一つの教科書を毎年使い回しているそう。

私は、二人の息子が学校へ行かなくなかった理由として、同国のこのような教育現場の課題の中でも特に教師の不足が挙げられると思う。教師不足から一人一人の生徒に向き合う時間が少なく、手厚い指導ができないため、いじめの早期発見もできず、彼らが学校へ戻ってこられるような働きかけもできないのではないかと。教育を受けられなかった二人の息子は、20 歳と 21 歳になった今も仕事に就くこともできず、家の手伝いをして毎日を過ごしている。

¹ 「ODA 民間モニター報告書」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shimin/monitor/16m_hokoku/philippines/index_opinion_10.html

「農地改革インフラ支援事業（Ⅱ）」 https://www2.jica.go.jp/ja/evaluation/pdf/2010_PH-P203_4_f.pdf

² 「第二の砂糖危機に直面するネグロス」 <http://altertrade.jp/download/No4SteveInterview.pdf>

しかし、そもそも一度教育を受けることから離れてしまったり、教育を受けられなければ、仕事に就けないという環境である事も問題である。手厚い保障やフリースクールなどの教育機関を設けることによって、支援の幅を増やすことが求められると思うし、まずは雇用を増やすことのできるような財源や制度を確立すべきであると思う。

5. 解決への取り組み

レーチャが言うには、息子二人が通学できなくなったことに対しての学校側の対策については、何も行動を起こさなかったという。彼女の話から、行動を起こさなかったのではなくて、やめてしまったのは自分たち側の責任とか、ただお金を十分に持っていないから学校側に掛け合う行動自体“無理”な状況にあったことが読み取れた。1 日きちんとした食べ物も食べることができていない状況に対して、レーチャは近所の人からお金を借りて過ごしている。なんとか生活するために借金をすることは、生きていくために必要なことであるから、自ら解決するための取り組みであると思う。

6. 解決を阻害するもの

レーチャは農地を耕作して賃金をもらいお金を借りて、日常の生活はなんとか成り立たせている状況であるが、学校の授業料が無料でも、結局娘二人の学校の文房具代や制服代に多額なお金を要するので、日常生活で節約に節約を重ねても、結局借金が膨らんでいつてしまっているのが現状である。また、息子二人が今から学校で教育を受けたいと思っても、村にはトリニダッド小中学校しかないため、簡単に教育を受けられる場がないことも阻害要因であると言える。

7. 周囲との関係

文章の最初の方でも述べた通り、二人の娘は『4Ps』を利用して小学校に行っている。借金だけでなく、4Ps といった政府団体からの援助があるおかげでなんとか学校に通うことができています。では 4Ps とは一体何であるのか。

4Ps とは、2008 年からフィリピン政府が始めた、「最貧困層への条件付き現金給付プログラム」と呼ばれるものであり、『Pantawid Pamilyang Pilipino Program』の 4 つの P をとって、一般的に 4Ps と呼ばれている。フィリピン国の目標である①極度の貧困と飢餓の撲滅 ②普遍的初等教育の達成 ③男女の平等の促進 ④子供の死亡率の減少 ⑤妊婦の健康の改善といった、主に 5 つの柱の目標達成するために、貧しい人々に現金支援を提供することによって貧困を緩和し、人的資本への投資を通じて世間における貧困の悪循環を断ち切ることができるように作られた制度である。これを受けるためには、①妊娠中の女性は出産前後に専門家の訓練とケアを受け、出産時に健康診断を受けることが必要 ②両親は月に一回行われるセッションの出席が必須③0 歳から 5 歳までの子供は、定期的に予防接種や健康診断を受けることが必須④6 歳から 14 歳の子供は年 2 回の虫ワクチンを受けることが必須⑤すべての子供が学校に入学し、月あたり少なくとも 85 パーセントの出席率を維持することが必要 といった、5 つの条件を完全に満たさなければならない。たとえこの 5 つの条件を満たし 4Ps を受けることができていても、このうちの 1 つの条件だけでも満たすことができなくなると、直ちにこの制度が受けられなくなってしまう。³

では、どうやって 4Ps を受けられる家を選んでいるのだろうか。そこには地道な選考方法があった。政府の統計を見て、地域の中で最も貧困な地域を選択し、その中でも一番貧

³ 「The Pantawid Pamilyang Pilipino Program」<http://pantawid.dswd.gov.ph/index.php/about-us>,
「Official Gazette Pantawid Pamilyang Pilipino Program」
<http://www.gov.ph/programs/conditional-cash-transfer/>

困な村を選ぶ。そして、実際に監査員が一軒ずつ訪問し、暮らしぶりを見て、住人に話を聞いて初めて、4Ps を受けることができるか判断がされ、家庭が決まる、という仕組みで選考している⁴。そのため、こちらから申し込むなどといった、何かの形で行政への投げかけは一切できない。また、監査員が訪問した時間帯に不在であった場合、その家庭は必然的に 4Ps を受けられる候補から外されてしまう。

実際に私たちがインタビューしている時に、4Ps を受けるチャンスを逃してしまった家族に出会った。その家族は、子供が学校に行き、母親が川へ洗濯をしに出かけた、たった一時間の間に監査員が訪問したため、不在という理由だけで、4Ps の支援を受ける家庭から外された。この現状に対して、この家族は少ない収入を交通費に充てて、町まで何度か抗議を行うこともしたが、全く聞く耳を持ってもらえず、今もなお支援を受けることができていない。

また、4Ps を受けるにあたって、トリニダット村ならではの問題がある。それは、前にも述べたように、トリニダット村が山の上にあるということである。そのせいで、都市からやってくる監査員は手間がかかり、それと同時に、政府は監査員に多額の交通費を支給しなければならない。このような理由で、トリニダット村に監査員がくることは他の地域より少ないという。不便な山の上だからこそ、物資供給も不十分で、きちんとした雇用が少なくお金を稼ぐことが難しいから支援がより必要な場所であるのに、交通が不便という理由や、政府の勝手な財政の使い方のせいで、きちんとした支援ができていないのが現状である。

しかし、幸い、レーチャの家では 4Ps をきちんと受けることができています。受けられたのは、お金を借りている近所の家の方が、その家庭よりも厳しい生活をしているレーチャの家庭の状況を知っていて、4Ps を譲ってくれたからである。そのため、ちょうど学校に行く年齢だったレーチャの娘二人は、現在 5 つの条件を守って、資金的援助を受け、学校に行くことができています。しかし、二ヶ月に一回、二人合わせて 2,200 ペソ（約 5000 円）の資金的援助のみであるため、一応支援は受けられているが、全く十分ではないという。

このように、支援が受けられたからといって、様々な問題が解決するわけではなく、支援があってもまだまだ厳しい生活を送らざるを得ず、人権が全く保障されていない暮らしをしていることがわかった。それと同時に、政府の支援は不十分であり、資金面だけで支援するのは違うと思った。というのも、資金的な援助だけでなく、もう一步踏み込んで、その地域にあった支援をしていくべきであると考えたからである。トリニダット村を例に挙げると、地形上、山の上に位置している村のため交通機関がなく、移動手段は徒歩かバイクぐらいしかない。また移動距離が長いため、お金を持っていなければバイクには乗れず、ただただ歩くことしかできない。トリニダット村の学校の先生の話によると、毎朝片道 4 時間もかけて登校する子もいるという。このような課題を踏まえて、例えば、政府が無料の交通機関を用意するという支援をすれば、今まで遠すぎて来られなかった子供も学校に来て教育を受けることができるし、村の人も病院や都市に行きやすくなると思う。

また資金面での支援が不十分でないことに対して、政府は根本的に財政を見直して、支援に充てられる割合を増やすべきだと思う。そのためには、市長などの管理職についている人の中でのきちんとした情報の提供、さらなる共有が求められていくと思う。

もし、4Ps を譲ってもらうことができていなかったら、レーチャの家族は今どうなっていたであろうか。もし近所の家の人があるまま 4Ps を受けることになっていたら、さらなる格差が生まれていたに違いない。このことから、貧困で困窮している人を支援する制度があっても、正しく使用しなかったり、対象者を正確に選択していかないと、本当に必要な人に支援が行き届かないし、さらなる格差を生む「悪循環」の原因になり兼ねないと思

4 「Department of Social Welfare and Development, Pantawid Pamilyang Pilipino Program (4Ps)」
<http://siteresources.worldbank.org/INTPHILIPPINES/Resources/4PsDSWD.pdf>

った。

8. 私たちとの繋がり

まず今回インタビューを通して痛感したことは、村の人々が、彼ら自身の置かれている状況に対して行動を起こせていないことである。なぜ行動を起こせていないのであろうか。私は、村の人々が自分たちの置かれている状況に対して少しは「しょうがない。」「もうこの状況は当たり前だ。」などといった気持ちがあるからではないかと考える。「訴えたいけどどう訴えればいいのか知識がないからわからない。」「わたしは貧乏な家庭に生まれたから、訴えられる身分ではない。」「農家に生まれたから農業をやればいい。教育の必要性があまり実感できない。」などといった感情がどこかにあって、今の生活が当たり前となってきてしまっていて、彼らは彼ら自身の認識が薄れてきてしまっているがために、このような状況がずっと続いてしまっているのではないかと考える。

そこで、私たちのインタビューを介して、人権を侵害されていることに気づいてもらうことはできないだろうかと考えた。なぜなら、現地の人びととのインタビューは、日本にも同じ状況があると私に気づかせてくれたからである。

近年、日本では、隠れ貧困が著しく増加し、非正規雇用が多くなっている。今は不自由な生活が送れている人でも、貧困に陥る可能性は身近にあると思う。非正規雇用で働いている人は沢山いるし私がブラック企業で勤める可能性だってある。だから、このトリニダード村のような暮らしはフィリピンだけではなく、日本にも言えることであると気づいた。

フィリピンの貧困はなぜ深刻なのか。大きな理由として、労働条件が挙げられる。もちろん教育をきちんと受けられたか、高い知識を持っているかは今後の暮らしに多少影響すると思うが、結局は労働環境によると考える。トリニダードの人たちは、そこでしか働く場所がなく、日当で働く農場労働者であるともらえる賃金も決まってしまう。それが問題であると思った。安すぎる賃金であることは誰もが分かっているが、成す術がない状態である。それを政府は何とか 4Ps などの制度を作って埋めあわせようとしている。しかし、根本的な労働環境の問題が解決されていなければいつまでたっても制度が必要となるし、制度が受けられていない多くの人はさらに生活が苦しくなる。だから私は、まず、根本的な労働環境を解決し、国民の人権を、憲法通りきちんと保障すべきであると考えた。

また、その制度に対してもおかしい面があると感じた。“学校へ行くことができいて、85 パーセント以上の出席が必要”という 4Ps の条件を例に挙げてみる。この条件があると、生活に究極に困っている人は、学校へ行かせられるほどのお金を持っていないため、必然的に支援制度を受けることができなくなってしまう。本当に金銭面で支援が必要なのに、その家庭に限って支援が受けられていない。では、なぜそもそも“学校に行っている者”のみなのであろうか。私は、学校に通えている学生は将来少しでも国の役に立つことができる可能性を持っているからという考え方があるからであると思う。これは昔の日本に似ている。状況は違うが、日本にも、戦時中・戦後の保障制度で、重度に怪我を負った人は支援や保障を受けることができなかった時代があった。軽度の人よりも重度の人の方が、ニーズが高いのに、受けられる人は軽度の障害を患った人だけであった。その理由として、政府は「重度障害を持った者は、将来国の役に立つ見込みがないため、支援しない⁵⁾」と述べていた。このシチュエーションは、支援が受けられる貧困者の条件と似ていて、国家の意向の一つであるのではないかと考えた。

これらの課題を解決するためには、今回だけの活動ではなく、定期的にこのような活動

⁵ 「日本の障害者の歴史」 http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/rehab/r054/r054_002.html
「戦争と障害者」

http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/prdl/jsrd/norma/n173/n173_038.html

を“続けて”いくことも大切なことである。そしてその活動を続けていく上で、レーチャの二人の息子のような教育を受けられないまま成長してしまった人に、もう一度教育を受けるチャンスを提供していったり、日本から寄付を募ることによって、移動手段となり、かつ、自然を壊さないような交通機関の提供などができればいいと思った。

それを実現するためには、もっと多くの人に深くインタビューし、様々な知識を得て、自分の知識を養うことがまず大切である。今回インタビューさせて頂いたからには、その人たちの「この生活から抜け出したい」という思いを受け継いでいる私たちが絶対に行動へと繋げていかなければならない。現地でも日本にいても、私たちにできることは沢山ある。まずはこのレポートのように、世界にはこのような実態があることを広めていくことから始めたい。